

平成 26 年度
A 日程 入学試験
国 語

注 意

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は 45 分です。
3. 問題は、1 ページから 13 ページまで印刷してあります。試験が始まったら最初に確認し、足りないページがあったら申し出なさい。
4. 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
5. 解答用紙には、受験番号・氏名を記入しなさい。
6. 試験が終わった後、問題冊子・解答用紙とも回収します。

1 次の1〜8の——線をつけたカタカナを漢字で、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- 1 反対派の主張にガテンがいかない。
- 2 外国の品物をあつかうザツカ店を営む。
- 3 雪道を走るために車にチェーンをソウビする。
- 4 熱を下げるためのナイフク薬をもらう。
- 5 目に入った異物をノゾく。
- 6 お手紙をいただきましたが、大変達筆ですね。
- 7 父の表情が険しくなる。
- 8 急げば損をすると相場が決まっている。

2 共子さんが漢字辞典で「科」という字を引いてみたところ、次のように書かれていました。



総画数 9

字のいみ

- ①ものを区切って分けたもの
- ②生物の分けかたの区切り
- ③すじみちをたてて調べる
- ④つみ

用例 科目
用例 バラ科
用例 科学
用例 前科

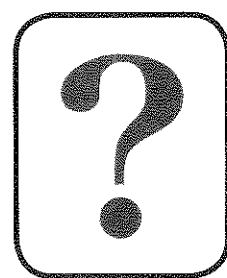
同じように、小学校一、二年生で学習する、ある漢字1〜4を漢字辞典で引いたところ、次のように書かれていました。それぞれ何という漢字を引いたか考え、その漢字を書きなさい。



総画数 4

字のいみ

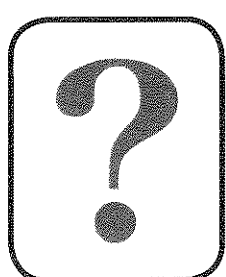
- ①かたよらない、正しい
- ②世の中、社会
- ③国や役所につながりがあること
- ④おもてむき
- ⑤どれにもあてはまること
- ⑥そんけいの意味を表すことば
- ⑦親しい呼び方



総画数 4

字のいみ

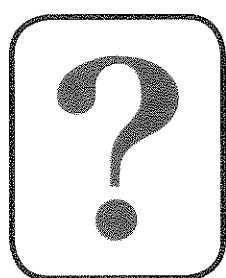
- ①むかしの時刻のあらわし方でまひる
- ②むかしの方位のあらわし方でまみなみ
- ③むかしのこよみの十月
- ④十二支の七つ目



総画数 12

字のいみ

- ①おおぜいでなにかをするときや、たくさんあるもののじゅんじょ
- ②みはりをする
- ③試合や勝負をかぞえるときにつかう
- ④ふだんつかうもの、そまつな



総画数 4

字のいみ

- ①あや、もよう、かざり
- ②じ、もじ、書体
- ③書いたことば
- ④てがみ
- ⑤本、記録
- ⑥学問
- ⑦むかしのお金の単位

星の美しい村

鈴木 敏史

星の美しい村でした

手をさしあげて

静かにふれば

星くずが ①のように

舞いおりてくるかと思われる村でした

いここに連れられて

村まつりにいく 道すがら

② わたしは なんと立ちどまって

星空を見あげたことでしょう

③ まつりから帰る人びとが

ときどき 通りすぎていきます

遠い宇宙からやってきて

また どこかへ遠ざかっていくように

—— こんばんは

人びとは きまって

そうあいさつしていくのです

④ 思いがけないことに

このわたしにまで

⑤ 星の美しい村でした

星たちが 人びとの心の中に

住みついているかと思われる村でした

たくさんの人びとと

ほのぼのとした光を なげあって

わたしは 次の日

家へ帰りました

(『星の美しい村』銀の鈴社 による)

1 ①にあてはまる漢字一字を考えて書きなさい。

2 線②「わたしは なんと立ちどまって／星空を見あげたことでしょう」とありますが、ここからどのような気持ちが読みとれますか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア いつもこの村でみる星空よりもいつそう美しいことにおどろく気持ち
イ 道のりが長くて星を見あげた回数も忘れてしまうような気持ち
ウ 村まつりには興味がわかず、ずっと星空を見ていたい気持ち
エ 見たこともないような星の美しさに思わず見とれている気持ち
オ 星の美しさを初めて知り、美しい星空のなごりをおしむ気持ち

3 線③「まつりから帰る人びとが／ときどき 通りすぎていきます」とありますが、どのように「通りすぎ」ていくのですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 見慣れない様子の奇妙な人びとがぞろぞろとならんでいる
イ 星空と同じように美しく着かざった人びとがすまして歩いている
ウ それまでは見えなかったはなやいだ感じの人びとが道を歩いている
エ まつりのさわがしさとはいっさい関係ない様子で、とりつくしまもない
オ まつりから帰るにはは無表情で、いかにもさびしげにしている

4 線④「思いがけないことに」とありますが、「わたし」として「思いがけないこと」とは何ですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア この村の人間ではない見知らぬ自分に、みなが親しいあいさつをかわしてくれたこと
イ 村の人とは思えないようなよそよそしい感じの人びとが自分にあいさつをしたこと
ウ いとこと一緒にいて村人とすっぴりな人びとだつもりでいたのに、警戒されていたこと
エ まつりの楽しい時間の中で、自分のようなさびしい人間までも気にかけてもらえたこと
オ 星の美しさに見とれて、村人を気にかけていなかった自分にも声をかけてくれたこと

5 線⑤「星の美しい村」とありますが、これはどのような村ですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 何もかもが美しく、きらびやかで洗練された人びとの村
イ どんな人も温かく迎え入れる、心の清らかな人びとの村
ウ 遠く世間から離れた場所にひっそりと暮らす人びとの村
エ 自然に満ちた美しい景観を守ろうとしている人びとの村
オ 他にない星空の美しさをほこりに思っている人びとの村

4 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

ここまでのあらすじ … 「私」は色白のやせた女の子だったが、その「私」よりさらに色白で背丈も小さい「痩せっぽちのお坊っちゃま」であるキヨシちゃんとは幼稚園からのお友だちで、小学校では同じクラスにもなった。

毎朝、キヨシちゃんを迎えにいった。彼の家が通学路の途中にあったからだ。門扉の脇にある木戸をあげ、しつとりと黒いランドセルを背負ったキヨシちゃんが出してくる。「おまたせ」。その後から、京人形のようなお母さまもあらわれて「道路を渡る時にはちゃんと左右を見るのですよ」というような毎日変わりばえのしない注意をいただいた。そうやって毎朝一緒に通学した。

学校にいれば他の友だちとも混ぜこぜになるのだが、帰りはまたふたりきりだった。当時の通学路には畑や森のような木立の暗がりやちよつと寄り道をすれば小川もあつて、季節によつては「グミや桑の実を食べることもできたし、その気になれば柿や栗を手に入れることも可能だった。ささやかな冒険に充ちた通学路は、姉弟のような私とキヨシちゃんのデートコースでもあったのだ。遠足や運動会のアルバムをめくると、ふたりはたいいてい肩を並べていて、ツーショットの写真の時には、私が体を少し傾けてキヨシちゃんと同じ背丈になるように、^① 気をつかったりもしていた。

そんなにも仲よしだったふたりが喧嘩したのは、小学校二年生の時だった。原因はまったく覚えていないのだが、かなり凄絶な喧嘩だった。かよい力をふりしぼって取っ組み合い、教室の机の上から床に倒れてもまだ離れずにやり合った。クラスメイトが集まってきて、呆れたように眺めていた。担任教師ののんちゃんがやってきて、ようやく喧嘩は納まった。しかしふたりの顔にはくつきりと惨めなひっかき傷が残ってしまった。

その日ばかりは別々に帰った。家に帰るのがうとうとしかつた。顔の傷を見れば、母に訊かれるにちがいない。お弁当入れの袋をブラブラさせながら家に辿りつくと、案の定母は声を上げた。「どうしたの、その怪我。喧嘩でもしたの？ 誰にやられたの？」。問いつめられた私は、思わず他の男の子の名前を言ってしまった。「……ワタナベくん」。同じ頃、キヨシちゃんもお母さまに問いつめられ、やはり他の友だちの名前を言っていたのだ。

心配したのんちゃんがふたりの家にやってきて、事態は明らかになった。^② 赤チンと絆創膏をくっつけた顔を見合わして、キヨシちゃんも私も唇をへの字に曲げていた。お互いがそれぞれ別の子の名前を告げていたことを知り、照れ臭いような、それでいて胸の奥が絞られるような複雑な気持だった。キヨシちゃんも同じだったにちがいない。

それから二年後の夏、キヨシちゃんはお父さまの転勤で四国へいくことになった。いよいよ出発という前日、キヨシちゃんがお別れの挨拶にくることになっていた。私はキヨシちゃんとの最後のひとときをどうすごそうかとあれこれ思案して、私がいちばん好きな^③ 白玉を作つてあげることにした。キヨシちゃんの家では白玉をいただくかないらしく、以前に母の作ったのを食べさせてあげると、とても喜んだからだ。私にとつて、初めて自分ひとりで作る白玉だ。母が心配して手を出そうとするのを拒み、やや不揃いながらもどうにか白玉を作り上げた。二十個ほどの白玉は、桶に張った冷たい井戸水の中でキヨシちゃんがくるのを待っている。

蝉の音がうるさいくらい^④の夏の午後、キヨシちゃんはいつもより少しだけおめかしをしてやってきた。ふたりきりになると妙に緊張して、うまくことが出てこなかった。私は台所へ逃れるようにいくと、冷たい水の中から白玉をすくい出し、二枚の皿に砂糖と一緒にのせた。ふたりは縁側に並んで白玉を食べた。胸がいっぱいのせいなのか、二枚の皿の上には白玉が残ってしまった。しばらくするとキヨシちゃんが、それを言おうと用意してきたらしい改まった口調で言った。「ともみちゃん、お別れにバイオリンをひいて下さい」。たぶん^⑤ ヴィヴァルディでも弾いたのだと思う。第一楽章を終えると、キヨシちゃんは白魚のような指を付けた手で大きな拍手してくれた。「ほく、お手紙書くね。ともみちゃんもお返事を下さい」。ふたりは指きりげんまんをした。蠅が鳴き始めた夕暮れの中を、キヨシちゃんの小さなうしろ姿が遠ざかっていった。

ひとりになると、どんなに歯をくいしばっても涙が滲んできた。私の母は、たとえ自分の娘であっても、そういう時に他者の気持ちに踏み込んできたりする人ではなかったのだ。涙は見られずにすんだ。どうにか涙が乾くと、縁側に仲よく並んだままの皿に残っている白玉を口に入れた。まわりだけが弾力を失くしたように柔らかく、芯の方がしつこりと堅くなっていた。白玉ではなく、白玉粉の味だけがした。それはちよつと哀しいような味だった。私はまた胸の奥が疼いてきて、バイオリンの弓を手に取ると松や二をこすり始めた。どうしてそんなことをしたのか不思議なのだが、ひたすら弓に松や二をこすり続けていたことを鮮明に覚えている。

バイオリンの弓に張られている馬のシッポの毛に吸収しきれなくなった松や二の白い粉が、私の膝にこぼれ落ちる。^⑥ 残照の中でその白い粉は、涙の代用品だったのかもしれない。初めてひとりで作った白玉。あんまり美味しく食べることはできなかったけれど、それでもやっぱり白玉は、いとしいような忘れられない味わいを残してくれた。

(筒井ともみ『舌の記憶』新潮社 による)

- 注1 苔むした Ⅱ 苔が生えるほど長い年月がたち、古めかしくなった
- 注2 勝手口 Ⅱ 一戸建ての裏手にある台所の出入り口、通常親しいあいだがらで使用される
- 注3 グミや桑の実 Ⅱ ともに木になる食用の実
- 注4 凄絶な Ⅱ すさまじく、ものすごい
- 注5 赤チン Ⅱ 赤色の消毒のための薬
- 注6 白玉 Ⅱ かわかしたもち米の粉を水でこね、丸めてゆでたもの
- 注7 縁側 Ⅱ 和室の外にあり、庭に面した細長い板張りの部分
- 注8 ヴィヴァルディ Ⅱ 有名なイタリアの作曲家
- 注9 松やニ Ⅱ 松の樹液を固めたもので、バイオリンなどの楽器の弓につけ音を大きくするはたらきがある
- 注10 残照 Ⅱ 日が落ちててもなお空に残っている夕日の光

1 線①「気をつかったりもしていた」とありますが、その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

- ア「私」は姉役として、弟分であるキヨシちゃんよりも背丈が大きいうちに見せたかったから
- イ「私」の背がキヨシちゃんよりも大きくなって、きらわれてしまうことになったら悲しいと思ったから
- ウキヨシちゃんはずかしがりやで、「私」が近よらないとうまく並んだ写真にならないから
- エキヨシちゃんのお母さまに、キヨシちゃんと「私」はいつも変わらずに仲よしだと伝えたかったから
- オキヨシちゃんの気持ちを考えて「私」との身長差をなるべく目立たせないようにしたかったから

2 線②「キヨシちゃんも私も唇をへの字に曲げていた」とありますが、このときの二人の気持ちとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

- ア担任ののんちゃんが喧嘩でも仲直りでも二人の間に割りこみ、余計な手助けをしたことに対する不満の気持ち
- イキヨシちゃんと初めての仲直りをするのがうれしく、笑い出してしまわないように顔を引きしめる気持ち
- ウ一緒に下校しなかったさみしさを伝えたいのに、相手を傷つけた罪悪感から顔も見られない気持ち
- エ仲直りをしたいが、あれだけ激しい喧嘩の後でさまりが悪く、なかなかすなおになれない気持ち
- オ喧嘩した相手に他の子の名前を挙げてごまかすという名案までまねされたようで、少しくやしい気持ち

3 線③「白玉を作ったあげることにした」とありますが、このときの「私」の気持ちとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

- ア四国に行ったら食べられなくなる白玉の味を覚えてあげてからお別れしたかった。
- イキヨシちゃんと最後に過ごす時間を、「私」なりにせいじいばいもてなしたかった。
- ウ「私」がいちばん好きなものを一緒に食べて、「私」を忘れないでもらいたかった。
- エ「私」が作った白玉は母が作った白玉より美味しいことにびっくりさせたかった。
- オキヨシちゃんがいなくなっても、「私」は一人でやっていけることを伝えたかった。

4 線④「夏の午後」とありますが、このときの「キヨシちゃん」のようすから読みとれることとして、ふさわしいものを次の中からすべて選び、記号で書きなさい。

- アキヨシちゃんは最後に「私」に言うことを頭の中で何度も用意していたため、会話ができなかった。
- イキヨシちゃんはお別れの前に、「私」のバイオリン演奏を聞きたいと思っていた。
- ウキヨシちゃんは「私」とお別れするひとときを、大切に特別なものとしてむかえてくれた。
- エキヨシちゃんは「私」と遠くはなれても仲よしの友達でいられるかどうかが不安で、再会の約束をほしがった。
- オ幼い頃から小さいキヨシちゃんは、細くてきゃしゃな指で、このときも「私」の弟のような存在だった。

5 線⑤「涙の代用品だったのかもしれない」とありますが、どういうことですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

- アあふれる涙の代わりに松やニをこぼし続けていたら、しだいに心が落ち着いていった。
- イ二度とキヨシちゃんに演奏できない後悔は、弓と楽器を大切にするという決心に代えることにした。
- ウ涙の代わりに松やニを膝にこぼすことで、キヨシちゃんとの思い出を忘れようとした。
- エ弓はつらい思いをすべて吸いこんでくれるので、これ以上泣けないときにこすると効果があった。
- オ人に涙を見せたくない意地から始めたが、弓をこすると自分の情けなさまでうすまっていった。

6 線⑥「あんまり美味しく食べることはできなかった」とありますが、その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

- ア 初めて自分一人で作った白玉で、よく火が通っていなかったから
 イ 美味しく食べたくて作ったのに、二人ともおなかがいっぱいだったから
 ウ 松や二の粉が膝にこぼれ落ちるのが気になって味がよくわからなかったから
 エ キヨシちゃんとの別れで、白玉を味わうゆとりがなかったから
 オ 涙でふやけた上に、涙のしょっぱい味と混ざり合ってしまったから

7 次の文の中から、この文章全体の表現と内容について書かれたものとしてふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

- ア 「私」がキヨシちゃんと一緒に過ごした思い出のうち、特に一緒に食べたものについていていい感じにつづられていることから、味覚というものがいかにすぐれているかが表れている。
 イ 喧嘩の原因や松や二をこする理由など、自分の行動についてはおぼろげな記憶しかないが、大好きだったキヨシちゃんとその家族についてはこと細かに覚えているという、記憶のかたよりを表している。
 ウ 「私」の行動や思いなどがいきいきとかかれた前半から、しんみりと切ない夏の情景をあざやかにえがいた後半へと移り、幼なじみとの別れが特別な記憶であることが表れている。
 エ キヨシちゃんのお母さまと「私」の母の特性をとりあげて対比させることにより、幼少時には当然のように手助けをもらっていた母親から少しずつ自立し、成長しようとする「私」のたくましさを表している。
 オ キヨシちゃんや松や二など、全体的に白さをきわ立たせるような素材を多く使い、擬人法を用いて「私」とキヨシちゃんの友情の美しさを表している。

5 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「ものをつくるうえで大切なのは感性だ」というが、そもそも感性とは何なのか。

日本人は、漠然としたイメージだけで「感性」という言葉を大事にしすぎているように思う。何かわからないながらも、とにかく大事にしなくてはいけないと包み込んで棚に上げて祀りてしまい、結局、みんなその実体がわからないままになっている、そんな感じがある。

「感性」という言葉でくくられているものを冷静に分析して整理していくと、もちろんその人の持つ感覚的なものもあるが、それ以上に、その人の（注1）バックボーンにあるものが基盤（きばん）になっているのではないかと考えられる。

作家としては、いつも自分で新しい発想をして、自分の力で創作しているという意識でやっている。しかし実際には、僕がつくる曲は、僕の過去の経験、知識、今までに出会い聴いてきた音楽、作曲家としてやっていくことで手に入った方法、考えたこと、それらの蓄積（ちくせき）などが基（もと）になって生まれてくるものだ。さまざまなかたちで自分の中に培（つちか）われてきたものがあるからこそ、今のようない創作活動ができていくわけだ。

もし僕がクラシックを勉強してこなかったら、あるいは（注2）ミニマル・ミュージックに影響を受けていなかったら、つくる音楽のスタイルも今とは異なるだろう。

「創作は感性だ」「作家の思いだ」と言い切ってしまうほうが作家としては恰好（かっこう）がいいが、残念ながら自分独自の感覚だけでゼロからすべてを創造するなんてことはあり得ない。

①とすると、僕は漠然とした感性なるもので創造をしているわけではないということになる。
 作曲には、論理的な思考と感覚的なひらめきを要する。

論理的思考の基になるものが、自分の中にある知識や体験などの集積だ。何を学び、何を体験して自分の血肉としてきたかが、論理性の根本にある。

感性の九五パーセントくらいは、実はこれなのではないだろうか。

②A「その論理性に基づいて思考していけば、あるレベルに達するものはいつでもできるはずだということになる。気分が乗った乗らないという次元に関係なく、きちんと仕事をしたらしなりの成果を上げられる。」

(注4)

だが、問題は③「それさえあればものづくりができる、作曲ができるということではないところだ。肝心な要素は、残りの五パーセントの中にある。それが作り手のセンス。感覚的ひらめきである。創作に(注3)オリジナリティを与えるその人ならではのスパイスのようなもの。これこそが「創造力の肝」だ。

ものづくりにおける核心は、やはり直感だと僕は思う。こっちの方向に行ったら何か面白いものができそうだというのは、直感が導くものだ。直感の研ぎが、作品をどれだけ素晴らしいものにできるか、より(注5)クリエイティブなものにできるかという鍵を握っている。

②B「もつと突き詰めていけば、その直感を磨いているのも、実は自分の過去の体験である。ものをつくるということとは、ここからここまでは論理性でここからが独自の感覚だと割り切れるようなものではなくて、自分の中にあるものをすべてひっきりめた(注6)カオス状態の中で向き合っていくことだ。

論理や理性がなければ人に受け入れてもらえるようなものはつくれないが、すべてを頭で整理して考えようとしても、人の心を震わせる音楽はできない。秩序立てて考えられないところで苦しんで、もがいて、必死の思いで何かを生み出そうとする。その先の、④自分でつくってやろう、こうしてやろうといった(注7)作為のようなものが意識から削ぎ落とされたところに到達すると、人を感動させるような力を持った音楽が生まれてくるのだと思う。

論理性と感覚的直感との兼ね合いを九五パーセントと五パーセントといったが、これは僕自身が置かれている状況によっても感じ方が変わる。

自分の勉強不足を感じて、もつといろんなことを見たり聴いたりして吸収して⑤経験知を蓄えなければいけない、と痛感しているときにはそちらの比重が増して、「九九パーセントくらいは蓄積がものをいうんじゃないか」と思う。

逆に、作曲活動に入って苦しみ悩んでいるときには、「蓄積で書けりゃあ、苦労はしないよ。直感が大事なんだよ」という気分になる。絶えず揺れ動いているのだ。

⑥うまく核心をとらえることができる、つくっているものが納得いくものになる。

実のところ、これが難しい。そのセンス、直感の(注8)啓示のようなものをいかにしてつかみとるかというところで、誰もが悩む。僕もまた、そこで日々苦しんでいるといえる。

(久石 譲「感動をつくれますか？」角川書店 による)

注1 バックボーン Ⅱ 背景にある考え方

注2 ミニマル・ミュージック Ⅱ 短いメロディやリズムをわずかに変化させながらくり返していく音楽

注3 オリジナリティ Ⅱ 独創性

注4 スパイス Ⅱ 料理の味をひきたてるために使う、香りの強い調味料

注5 クリエイティブな Ⅱ 創造的な

注6 カオス状態 Ⅱ 混ざり合って区別できない状態

注7 作為 Ⅱ わざとすること

注8 啓示 Ⅱ ふつう知ることのできないものが神秘的にあらわれること

1 線①「僕は漠然とした感性なるもので創造をしているわけではない」とありますが、どういうことですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 非常に大切にしている感性を自分だけが利用して創作するのは、許されないということ

イ 実体のわからない感覚的なひらめきだけで創作するのは、不可能であるということ

ウ 人によってさまざまに理解できる感性だけで創作するのは、非常に難しいということ

エ 実体を理解するのが難しい感性で創作するのは、たいへんな苦労があるということ

オ すべて感覚的なひらめきだけで創作するのは、恰好がいいことではないということ

2 ②A、②B にあてはまることばとしてふさわしいものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で書きなさい。ただし、同じ記号は二度使えません。

ア あるいは イ ところが ウ また エ つまり オ もし

3 線③「それ」とありますが、その内容としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 感性 イ 感覚的なひらめき ウ 自分の中にある知識や体験 エ 論理的な思考 オ 作り手のセンス

4 ―線④「自分でつくってやろう、こうしてやろうといった作為」とありますが、どういうことですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 自分の知識や体験に基づいた論理的な思考によって作品を創作しようとする事
イ 大勢の人に受け入れられるような一般的な作品を作ろうと意識すること
ウ 感性だけでゼロから創作すれば必ずよいものができると考えること
エ 作品を作り出す時の、いろいろ悩んだり苦労したりしているカオス状態のこと
オ みながおどろくような、すべて独自のメロディなどを作り出そうとすること

5 ―線⑤「経験知」とありますが、これを言いかえた表現を文章中から十七字で探し、初めと終わりの三字をそれぞれ書きぬきなさい。ただし、句読点やかきかっこなどの記号も一字にふくまれます。

6 ―線⑥「うまく核心をとらえる」とは、どういう意味ですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 今までの知識の蓄積をうまく思い出すこと
イ 直感的なひらめきが生まれる時をひたすら待つこと
ウ 直感の啓示のようなものをつかみ取ること
エ 自分だけでつくろうという功名心を捨てること
オ 他の人の作品のよい部分を参考にする事

7 次の文の中から、この文章の内容と合っているものをすべて選び、記号で書きなさい。

ア 創作するには、論理ではつかみきれない神秘的な感性の実体を直視すべきだ。
イ 創作の源である感性には、体験などからくる論理的な思考もふくまれている。
ウ 人を感動させるような素晴らしい作品をつくるには、やはり直感が決め手となる。
エ 音楽的な知識や今までの体験的蓄積があれば、迷うことなく感動は生み出せる。
オ すぐれた音楽家であれば、創作にまつわるカオス状態からぬけ出すのが早い。

(問題はこれで終わりです)

国語 A日程 問題訂正

2ページ

2 字のいみ

(誤) ③むかしのこよみの十月

←

(正) ③むかしのこよみの五月

②6A 国語解答用紙

8	7	6	5	4	3	2	1	1
	し く		く					

4	3	2	1	2

	小計
--	----

5	4	3	2	1	3

	小計
--	----

7	6	5	4	3	2	1	4

7	6	5	4	3	2	1	5
		終わり	初め		②B	②A	

受験番号	氏名
A	

	得点
--	----